

陳那の唯識説

——集量論現量章第十一偈の解明——

武 邑 尙 邦

一
陳那の唯識義の理解は、インド瑜伽行派の歴史的展開に、一つの轉機を與えたようである。即ち傳へられる種々の資料から、彼が(一)無著世親の聖教隨順派の唯識論者であるに對して、正理隨順派の唯識論者であり、(二)無著世親によつて說かれる八識の機能を六識に分與して六識説に立ち、(三)無著世親が無相唯識派であるに對して、有相唯識派であること等を知り得るからである。この中、第一は陳那の唯識說理解の根本態度を示し、それが第二、第三の立場と學說を主張せしめたと思われるが、就中、彼の唯識說を際立つて特徴付けるものは、第三のそれである。

さて、唯識説に於ける有相派とは、覺賢 (Bodhiśāstra, A. D. 800—A. D. 860) によれば「行相 (ākāśa) が依他の有體法である」ことを主張する一派をいうが、ここに行相とは大乘唯識説では、四分中の見分を指すから、有相派とは見分を有體法として留めてゐる學說であり、それは境空識有の立場をとるものといわねばならない。これに對して無相派といわれる無著世親は行相の無體法なることを説く一派と解されるから、相分はいふ迄もなく、見分もまた遍計の無體法として境識俱空の立場に立つものである。この意味で無

著等の唯識説と陳那のそれとは、明かに區別されねばならない。いま、覺賢のいうところに従つて、陳那が有相派であつたとすれば、彼は四分中、初めの二分について相分は遍計性、見分は依他性と主張したことになるが、このような理解は、古來いわゆる四分説の解釋中に直ちに見出すことができない。これは陳那の唯識說の理解に新しい問題を提起するものである。いま、この問題を手懸りとして、いわゆる陳那の三分説なるものを吟味し、併せて彼の唯識說の立場を明かにしようと思う。

二

陳那の三分説を根據付けるものとして從來唯識家が指摘するものは、『成唯識論』卷二に引用される「似境相所量、能取相自證、即能量及果、此三體無別」という『集量論』の一偈であるが、これは正しく現存チベット譯『集量論』現量章第十一偈の次の偈である。

「[知が生ずる] 時、かの顯現 (abhidā) は所量であり、能取の行相 (grāhaka) と自證 (svasatvīd) とは、夫々その量と量果とであり、それらの三は、その故に別々のものではない。」さて、この偈の中で顯現とは「境の顯現」を意味し、それは量られるものとしての對境を指し、能取の行相とは對境を量るもの、即

ち境の顯現である所取を境性（artha）として、能取する働きをいい、自證とは所取たる境を能取して得たる領納の知をいい、それが量つた結果としての量果である。即ちこの偈は『集量論』が當面の問題とする量に關して、所量能量量果の關係を識の位態としての相見自證の三分に關係せしめて述べたものである。而もこの偈が、識の二相の顯現を成立せしめるために、量果を自證と説くことに關連せしめて説かれてゐることは注意されねばならない。

しかるに、從來はこのような敘述の連關性を全く考慮しないで、この偈を唯だ相見自證の三分が依他起性であるとする陳那の三分説の立場を確認するものとしてのみ考え、顯現を相分、能取の行相を見分、自證を識の自證分とし、特にこれを發生的な識の轉變説の理解から、自證分を識自體分として、この識自體分が轉似二分の原理によつて、轉變して相見二分に似現すると解釋して、三分は共に依他起性であり、體を一にすることを説くものと解釋してきた。しかし、ここでまず問題となるのは、陳那のいう自證が、このように果して理解され得るかという點である。

いま、陳那の自證の意味を『集量論』の上に尋ねると、彼は自證を量果として説くために

「自證がここ〔現量〕では、量果である。知は二の顯現より生ず自の顯現と境の顯現とである。この二の顯現によつて自證がある。それが果となるべきである。その故如何とならば、彼の自性によつて義は決定するからである。若し識が所具の境を義とする時、その時、彼と隨應する自證が愛と非愛との義を分別し決定する」と

という。即ち陳那によれば、識の二相の顯現によつて成立する量果

としての自證は、所量能量としての識の二相の顯現と離れてはあり得なく、而もそれは識自らに所具である境を對象とする時、その識と隨應して對象の愛と非愛とを分別し決定するものである。されば、ここにいわれる自證は、決して識自體分として有性的なものではなく、それは識自らが自らに具している境を了知することによつて生じた領納の知を意味しているのである。従つて見るものとしての識の自の顯現と自證とは別物であり得ないから、「量は」有作用と考えられるから、量は量果に於てあり、ここでは有外境論者の如く、量より量果を別のものと成することはなく、果となる知、それ自身が境の相を具して生じたものであり、作用をもつと考えられる」と陳那はいふ。

かくて、自證とは識の二相の顯現によるものであり、境の領納の知をいう。而もそれは識自らと識自らの所具である境とを領納して生じたものであり、更にその識自らと境とは、實は量と所量として「多種の行相の了別知をとつて施設せられた」ものである。然るに、また量果はこの量と別のものではないから、この場合、知の主質となるものは識の二相の顯現であり乍ら、知の成立は識の自としての顯現たる能取の行相にあるといわねばならない。即ち境は顯現であり、それは識の自としての顯現たる能取の行相によつて境性としてとられるものであるからである。

以上の如く考える時、いわゆる陳那の三分説の根據として出される前掲の偈の理解は、從來のものとは異なるべきであり、そこでは識の自證は能分別であり、相見、即ち所取能取は所顯現相として所分別であり、而もその中、能取の行相たる見分以外に自證はあり得ないという關係が、全く認識論的に示されている。従つて、陳那で

いう相見自證の三分は、(一)相見二分は識の境の顯現と自の顯現として、識の所顯現相であり、自證はこの「識の二の相性が成立すると成ぜられるもの」として、この所顯現相による自證である。(二)相分は識自らの所具の境として識自らの顯現たる見分によつてとられる所取分であり、識の自としての顯現は、それを能取する能取分である。而も所取は所量、能取は能量であり、自證は量果であり、更に量是有作用として量果に於てである。(三)かくて三者は夫々別々ではない等という關係で示されるのである。

かくて、陳那が「識の二の相性が成立するとき成ぜられるもの」として自證を説く限り、明かに彼は三分説である。しかし、彼の自證は量果として量たる能取の行相と別ではない。従つて、ここでは三分は相分が見分によつて、見分が自證分によつて、夫々とられるという並列的關係に於て考えられていないし、また自證を自體分として有性的に見る考えも現われていない。ところで、この三分に對する三性的理解は陳那に於てどうであつたかという點については、『集量論』では明かでない。このために我々は『集量論』製作の素材となつた彼の他の著作を參照しなければならない。

三

陳那の三性觀については『般若波羅蜜多圓集要義論』と『掌中論』とを尋ねなければならない。この中、初めの『圓集要義論』は、三性觀によつて般若波羅蜜の教と道とが成就され、般若無二智への證入がなされ得ることを説いている。即ち陳那は十散動分別によつて示される妄分別を除くために、十六種空を觀すべきことを示し、それによつて妄分別が除去されるならば、一切の所分別に於て空觀が成就することとなり、更に所分別に於ける空觀は同時に能分別の識

に於ても緣起の理に達せしめることとなり、般若無二智の實現がなされることを明かにしている。従つて、ここでは所分別の相見二分は遍計性として無であり、依他性たる能分別の識もまた假有にすぎないとして、唯識皆空觀を成じ、圓成實性を證得することとなるのである。かくて、ここに説かれる三性は、註釋者三寶尊のいう如く、まず分別たる遍計所執性とは凡夫の分別心による諸法に於ける能所の差別相の顯現であり、それは非清淨なる智に於ける能取と所取との二取の顯現として理解されている。しかし、このような識の所取能取としての顯現は、實は無明の力によるものであり、それは識の二相ではあるが、識性は本來無二智に安住するものであり、その識性は無明の他の力によつて所取能取と顯現するという位態に於て依他起性といわれるのである。而も、このような無明の他の力を離れるところに、遍計としての識の二相を遠離して、無生といわれる理を成ずるのである。従つて、この場合では、依他起性とは了別知としての識の顯現という位態に於ていわれているのであるから、所取能取の遍計の妄分別たる所分別に對する能分別として識は依他起性なのである。即ち「境と自との顯現」である識、それが所顯現相たる所取能取の二取の遍計性に對して依他性なのである。

『圓集要義論』では、以上の如く、陳那の唯識とは、能分別の識が有であり、所分別としての所取能取が遍計として無であるという意味である。このような主張は『中邊分別論』の「虛妄分別はあり、そこに二つのものあるに非ず」という主張と規を一にし、また、安慧の「識轉變の體としてある故に、一切無にも非ず」「所取能取の二は兎角の如く全無、而も虛妄分別は勝義に於て自性としてあり」という立場とも共通する。

更に、またこのような考え方は『掌中論』の中でも確かめることができる。

例えば

「彼（繩）の分を見れば、彼に於ける知もまた、恰も蛇の如く誤れるものなり。」

彼の繩もまた支分に分解して觀察すれば、繩の自性は不可得である。それが不可得なれば、繩に於ける所想もまた蛇の領納の如くに、唯だ迷妄にすぎないものとなりおわる——藏文拙譯

と説く。これは有名な蛇繩（麻）の例えをもつて三性を示す文であるが、ここでは明かに依他の覺知をもつて迷妄分別としている。而もこれにつづいて

「[境を]縁する有相の覺知もまた繩の如く唯だ迷妄にすぎない」ともいわれるから、所取たる境の顯現はいうまでもなく、それを能取する識の自としての顯現も、それが顯現である限り、遍計の無體法なのである。

このことは、更により明かに次の如く説かれる。

「若しも考うるに、瓶等の外界の事物は自性不可得であるから無である。〔このように無であるから〕遍計性であることは明かに正しいことである。〔しかし〕それらを縁する有相の迷妄の識、それは存在すると思われる。例えば幻化や雲氣樓等は無であつても、それらを縁する有相の識は〔有である〕如くであるから許されるというならば如何。」

ここでは、まず境の無體法を説いて、それと關連して、境の相を有する識の存在を問題とするのであるが、これに對する答えは、次の如くなされる。

「迷妄にして、それは眞實ではないから、恰も顯現の如く無である。有に非ざる境が顯現せるものであり、恰も彼〔境〕の自性の如く〔空となる〕なり。」

かの迷妄〔の識〕が事物の自體を知つたとしても、かの事物の自體はその如くに存在するものではない。これは前に既に述べた。かの對象が無であるならば、また〔識の〕自性も能力がないから眞實ではない。眞實でないから迷妄の自性の如きものであるといわれる如く知る」

これらによつて、明かな如く陳那では、一切の境としての顯現が無であるから、その境の相を具して生じ、その無の境を境性として能取する自の顯現も無であるとして、共に遍計性とするのである。即ち識の所顯現相としての二取は共に遍計性として無とするのが陳那である。

しかし、ここにも問題とされている如く、このように、一切が無であるとすれば、それは無識無境であり唯識ではないこととなるのではなからうか。これについて『攝大乘論』では、能分別の識は有、所分別の所顯現相は無であるとして解決されたし、『中邊分別論』でも「虛妄分別は有り、そこに二つのものあるに非ず」として、唯識を成立した。いま陳那はこの點について、自證説をなしたように思われる。というのは、陳那は能取の識の無をいうのに『掌中論』で「それは決定に至らないからである」という理由をあげているからである。即ち能取の行相は、境の相を具して生じたものではあるが、それは本来無である境の相を具するものであるから、覺知の決定に至らないからである。従つて、これを逆に考えれば、覺知を決定するものは有であると考えられる。即ち既に示した如く陳

那は自證について、そのみが「その自性によつて義を分別決定する」というから、彼はこの自證に於て識の有を説いたといえるであらう。即ち陳那では唯識とは、この自證に於て成り立つといわねばならない。

このように考えてくるならば、陳那の三分説は、却つて安慧の一分説に同ずるように思われるが、陳那は單に所顯現相として能取の行相を、境の顯現と共に無として斥けないで、境として識が顯現する時、そこに境を領納する作用として識の自としての顯現が働いているのであり、この作用こそが識が識自らの存在性を示すものであるとして、量果である自證と量である能取の行相とを別物でないとしたことは、識の性格をより明かにしたものである。即ち彼は識は自としての顯現である能取としては、所取が無であるから、本來的に無であるが、同時に量果としての自證に於て、そこそが覺知を決定するものである點では有であると、無の有として識の性格を明かにして、境空識有の立場を打ち立てたのである。

1 拙稿「陳那教學の課題」(哲學研究、第三百九十六號、四七頁—五二頁)。

2 「有相家は陳那等の所宗であつて、行相が依他起性であると語る云云」——『智心髓集疏』。

3 *Yadābhāṣaṁ prameyain tat pramāṇa-phalate punaḥ, grāhākāra-saṁvittvayos trayain nātāḥ prithak-kṛtam.*

(Louis de la Vallée Pausin; *Vijñapti-mātrata-Siddhi*, vol. I, p. 131.)

4 *Hasta-vāla-nāma-prakarana-vṛtti, mDo-ḥ-Glel, Tsa. 313-315. bStan-ḥGyul. ed. by sNar-Thaṅ.*

陳那の唯識説(武邑)

5 「それは決定に至らないから、彼を縁ずる有相の智も、繩の如くに確かに、唯だ迷妄にすぎないのである」——『掌中論』藏文拙譯。

最近フランスに於けるインド・佛教研究の動向 2

5 極東學院の刊行になる『通報 (*T'oung Pao*)』は已に四十二卷に達したが、これには東洋史の論文を多く掲載し、時折佛教史にも言及している。

6 アジア協會の會長は J. Bacot 氏であり、民藝館の Marcel-Dubois 氏はインド樂器について一書を著した。同會發行の古い傳統をよむ *Journal Asiatique* は、再び戦前同様の感容を示している。

以上のほか、佛教研究では Talon 女史が佛教論著目録を編纂し(哲學雜誌一九五一年一月、山口益博士の紹介参照)、燉煌出土佛典の研究にも従事している。故 Foucher 教授の『佛陀傳』は、考古學の研究の成果も多く取り入れられ、學術的價值を謳われており、また『ジャータカ』についての遺稿もある。フランスでは神秘主義に對する關心がかなり強く、ラーマクリシュナ系統のヴェーダーンタ説やゲノンの著書が廣く愛好されていると云う。(中村元)